

Title	シナゴーク：その成立と意義について
Sub Title	Die Synagoge : Ihre Entstehung und Bedeutung
Author	羽田, 功(Hada, Isao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.295(78)- 314(59)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0314">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0314</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# シナゴーク

——その成立と意義について——

羽田 功

## 1. はじめに

ユダヤ人の歴史が苦難と迫害の連続であったことはよく知られている。古くは、アッシリアによる北イスラエル王国の滅亡や新バビロニアによるユダヤ人のバビロニア捕囚があり、キリスト紀元直後にはローマに対する反乱の結果、ユダヤ人は祖国を喪失し、世界中に離散することとなった。ヨーロッパにおけるユダヤ人の歴史を振りかえっても、第一次十字軍によるラインラント一帯での集団的殺戮に始まり、黒死病期の大迫害、15世紀末に起こったイベリア半島からの追放、17世紀半ばのポーランドで起こったコサックによるユダヤ人の大量殺害などを経て、第二次大戦中のホロコースト（ショアー）にいたる絶え間ない迫害の数々を思い出すことができる。

しかし、それにもかかわらずユダヤ人たちの内部には「ユダヤ人であること」の意識が生き延びつづけてきたこともまぎれもない事実である。世界中に離散（ディアスポラ）したユダヤ人たちがそれぞれの居留先で組織した共同体の歴史を見れば、そこには多様な経験のあったこともたしかだが、そうした差異を超えて、ユダヤ人の間に「ユダヤ人」としてのある種の強固な自己意識があったのである。たとえば、シャバト（安息日）について紹介する著作の冒頭で、レア・フライシュマンはこの点について、次のように語っている。

「ユダヤ教が何千年にもわたって保持されてきたこと、また、あらゆる種類の迫害や新たなものへと移行するように説き伏せるあらゆる形式

の試みが行なわれたにもかかわらず、モーセの教えから離れようとしなかった人々がいたことは決して偶然ではない。多くの強力な帝国は滅び、その文化は忘却の淵に沈んだが、しかし、イスラエルの民の中にはつねに神の言葉をつかんで放さず、周囲の諸民族の圧力や信仰に屈することのない核心が存在していた。内部に閉じこもりながら、ユダヤ人はその教えを世代から世代へと受け継いでいったのである<sup>(1)</sup>。

フライシュマンの触れている「モーセの教え」あるいは「神の言葉」、すなわち「トーラー（律法）」あるいは聖書が数千年におよぶユダヤの歴史を超えて、また、まさに世界中に散らばる離散ユダヤ人の空間的広がりを超えて、ユダヤ人を「ユダヤ人」たらしめてきたことはまちがいが無い。そして、イスラエルの地（エレツ・イスラエル）、エルサレムに神殿が存在した間はこれが民族の宗教的中心であったとすれば、紀元70年にローマによって神殿が破壊された後は、晩年のフロイトが記しているように「これ以降、追い散らされた民族を結束させてきたのは聖書と聖書をめぐって払われてきた精神的な努力であった」<sup>(2)</sup>こともたしかである。

もちろん、このような民族の歴史や宗教を伝承するための「精神的な努力」として第一に挙げられるのは、いうまでもなく聖書をはじめとするさまざまなユダヤ教の聖典編纂作業であろう<sup>(3)</sup>。だが、それと同時にこれらの聖典をユダヤ人たちに教え伝える制度・施設を整備することも重要な「精神的な努力」のひとつであったことを忘れてはならない。そして、その制度・施設の重要な構成要素のひとつがシナゴグであり、その典礼にほかならなかった。

「ユダヤ会堂」とも「ユダヤ教会堂」とも訳されるシナゴグは、ユダヤ人の長い歴史の中であって、多くの時間を宗教上の中心施設として、またユダヤ人共同体のコミュニティセンターとして求心的な役割を果たしてきた。特に神殿を破壊され、祖国を追われたユダヤ人たちが本格的な離散生活を始めてからはシナゴグは祈禱の行われる「霊的な中心地」<sup>(4)</sup>としてだけでなく、離散ユダヤ人たちをその歴史と伝統につなぎとめる「魂の故郷」<sup>(5)</sup>としてもその意義をますます高めていった。その意味では、ユダ

ヤ人にとって、シナゴークこそは時間と空間を超えて、自分たちがユダヤ人であることを確認するために不可欠な場所だったのである。

ここでは、それ自体が長い歴史を誇るシナゴークについて、特にキリスト教ヨーロッパとの関連も視野に収めながら、ユダヤ第一神殿破壊から聖典編纂作業の終了時期あたりまでの時代を中心にその成立事情と意義について検討を加えてみたい。

## 2. シナゴークの起源と成立

シナゴークの起源についてはさまざまな説があるが、中でもこれをもっとも古く想定しているのは新約聖書の使徒言行録15.21である。そこでは、モーセの慣習にしたがってキリスト教徒にも割礼を求める声に答えて、ヤコブが「モーセの律法は、昔からどの町にも告げ知らせる人がいて、安息日ごとに会堂で読まれているからです」と、シナゴークの成立がモーセの律法授与の時代まで遡ると受け取ることのできる発言をしている<sup>(6)</sup>。

あるいは、紀元前586年にはじまるバビロニア捕囚の時代にシナゴークの起源を求める説もある。その根拠としては、エゼキエル書11.16の「主なる神はこう言われる。「確かに、わたしは彼らを遠くの国に追いやり、諸国に散らした。しかしわたしは、彼らが行った国々において、彼らのためにささやかな聖所となった」」が挙げられているが、本来の「聖所」たる神殿に代わるこの「ささやかな聖所」を本格的なシナゴークと同一視できるかどうかについてはかならずしも見解が一致しているわけではない<sup>(7)</sup>。しかし、バビロニア捕囚期は、祖国とソロモン神殿（第一神殿）を失ったユダヤ人にとって民族と宗教が存亡の危機に見まわれた時代であり、それゆえにユダヤ人の民族的・宗教的結束が高まり、むしろユダヤ教の基盤が確立・強化された時代でもあった。とすれば、捕囚民たちがその危機を克服するための必要から集会や礼拝のための場所を生み出したことは十分に考えられる。少なくとも、捕囚のユダヤ人たちが預言者エゼキエルのもとに集まって祈りを捧げたり、神の言葉たるトーラーを学んだことはほぼ確実である。また、ペルシアのキュロスによる解放後に、捕囚民た

ちがこの慣行をイスラエルの地に持ち帰ったこともまちがいない。

その後、シナゴグがどのような歴史的発展を見せたのかについてはなお不明な点が多く残されているが、文献的には1902年にアレクサンドリア近郊20キロほどにあるシュディアで発見された大理石柱の碑文がシナゴグについて触れた最古の記録とされている。この碑文からは、紀元前3世紀後半、ユダヤ人たちがエジプト王プトレマイオス三世（在前246-221）とその妻にシナゴグを奉納したことを確認することができる。遺跡としては紀元前2世紀後期、ギリシアのキクラデス諸島にあるデロス島に残るシナゴグが最古のものとされている<sup>(6)</sup>。

シナゴグについて言及するその他の記録としては、まずタルムードを挙げるができる<sup>(9)</sup>。タルムードに関して第一に触れておくべき点は、これがエゼキエル書の「ささやかな聖所」をシナゴグと解釈していることであろう<sup>(10)</sup>。さらにタルムードによれば、1世紀頃のアレクサンドリアには数多くのシナゴグが存在し、中でも大規模なシナゴグにはさまざまなユダヤ人職業ギルドのメンバーがともに席についていたことがわかる。そこには、この大シナゴグを見なければ、「イスラエルの栄光を見たことにはならない」とさえ記されている<sup>(11)</sup>。あるいは、同じタルムードにおいてヘロデによって大規模な改築が行なわれた「神殿を実際に目にしたことのない者は、人生において壮麗な建築物を見たことがあるとは言えない」<sup>(12)</sup>と謳われた第二神殿が70年にローマによって破壊されたときには、エルサレム市内には480もしくは394のシナゴグが存在したことや、神殿の山の上にもシナゴグがあったことにもタルムードは触れている<sup>(13)</sup>。また、先にも触れた新約聖書の使徒言行録にもイスラエルの地以外のディアスポラにおけるシナゴグについて数多くの言及が残されている<sup>(14)</sup>。

いずれにせよ、こうした記録からわかるのは、紀元1世紀には、イスラエルの地にもディアスポラにも、シナゴグがすでに確固たる制度・施設として定着していたことである。

### 3. 神殿とシナゴーク

それでは、シナゴークとはどのような意味と機能を持つ制度・施設として成立したのだろうか。ひとことで言えばシナゴークは礼拝のためにユダヤ人が集う場所として、また宗教上の教えを受ける場所として誕生した。古代においては、これに裁判所の機能も付加されていた<sup>(15)</sup>。シナゴークに求められたこれらの意味・機能のうち、特に最初に挙げた二点は当時のユダヤ教とユダヤ人の置かれていた状況についていくつかの重要な問題点を語っているが、これらの問題を考える場合、避けて通れないのが神殿の存在である。そこで、まず神殿についてその成立事情と性格について眺めておきたい。

奴隷状態にあったユダヤ人（ヘブライ人）たちを率いて出エジプトを果たしたモーセは、神との契約の徴としてシナイ（ホレブ）山上で神によって十誡を記した石板を授けられた。この十誡はやがてユダヤ教の基本聖典たるトーラーへと発展し、神によって約束されたカナンの地に定着したユダヤ人たちはこのトーラーを中心として古代のイスラエル宗教共同体を成立させることになる<sup>(16)</sup>。この間、神との契約の徴である石板は「契約の箱」と呼ばれる聖櫃に納められ、シロの聖所に安置されてユダヤ人の信仰の中心を形成していた。しかし、ペリシテ人による圧迫が強まった士師時代の末期にあたる紀元前1050年頃にシロが破壊され、「契約の箱」はペリシテ人によって奪われてしまった。

「契約の箱」がふたたびユダヤ人の手に戻るにはダビデの登場を待たねばならなかった。ユダヤ王国の初代国王サウルがペリシテ人との戦いで戦死した機会を捉えて、ユダの、次いでイスラエル全土の支配者となったダビデは、エブス人の都市国家として中立的な位置にあったエルサレムを首都と定め、ペリシテ人から奪い返した「契約の箱」をエルサレムのシオンの山へ運び入れ、ここに幕屋を築いてこれを安置したのである。ダビデはさらに幕屋に代わる本格的な神殿の建設を計画したが、サムエル記下7のナタン預言にあるように、これを実現したのはダビデの王位を継いだソロ

モンであった。これが第一神殿（ソロモン神殿）である。この第一神殿は、ソロモンの死後、王国が北イスラエルと南ユダに分裂し、前722年に北王国がアッシリアによって滅ぼされた後のヒゼキヤの時代には南ユダにおける唯一の礼拝所として、また前7世紀後半のヨシアの時代には民族全体の唯一の聖所としてその地位を最終的に確立することになった。

だが、南ユダ王国も新バビロニアによって前586年に滅亡し、ユダヤ人は捕囚民としてバビロニアに連行されることになる。いわゆるバビロニア捕囚であるが、このとき壮麗さと規模の大きさを誇った第一神殿はエルサレムとともに徹底的に破壊され、ユダヤ人はその民族的・宗教的中心を一度に喪失したのである。

バビロニア捕囚という異邦における危機的な状況にあって、なお自分たちの過去とのつながりを保持し、民族的・宗教的な独自性を守り、共同体意識を活性化させ、さらにそれを強化させるには、ユダヤ教の指導層は、神殿に頼ることなく捕囚民たちを一体化させ、民族の歴史と宗教の保守へと駆り立てる道を探るしかなかった。そして、そのために捕囚期の預言者が選び取ったのが、トーラーから朗読を行ない、神の警告と慰めを語り、また、それらを通して捕囚民たちに律法を教授するという方法であった。特にシャバトやさまざまな民族・宗教の記念日にはユダヤ人たちは預言者のもとに集まって、その言葉に耳を傾けた<sup>(17)</sup>。その限りでは、こうした仕組みや方法は、神殿に代わるものとして意識的に選び取られたとすることができる。そして、これが後にシナゴグにおいて定期的に催されることになる礼拝の端緒ともなったのだった。

しかし、ここで注意する必要があるのは、それにもかかわらず、捕囚期に生まれ、後のシナゴグの原型となったと考えられるこの集会と礼拝の場はけっして神殿の代替物ではなかったという点である。何よりもナタン預言の中で神は次のように語っていた。

「あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える

……あなたの家と、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに固く据えられる」(サムエル記下7.12-16)。

つまり、この預言以降、ダビデ家と王国あるいはその首都たるエルサレムおよび神殿は不可分・一体のものとして理解されることになるのである。したがって、万が一バビロニアがそれを許したとしても、そもそもが捕囚の地に神殿やそれに代わるものを建てることは不可能であった。さらには、バビロニア捕囚後の第二神殿時代に、すでにシナゴグがイスラエル内外に数多く建設されていたことから、また、シナゴグにおける礼拝が祈禱とトーラーの朗読に限られ、神殿祭儀の根幹をなす供犠の儀式が導入されなかったことから、神殿とシナゴグが明確に区別されていたことは明らかである。

あるいは預言者ミカをはじめとする代々の預言者たちが、ユダヤ人がトーラーに違反すれば神殿が破壊されることを繰り返し警告していたことを思い返してもよいだろう<sup>(18)</sup>。だからこそ、トーラーに背いたために祖国と神殿を失ったとされたバビロニアの捕囚民たちはあらためてトーラーを学習・遵守し、またエゼキエル書40-48に語られる神の慰めの言葉と新たな神殿のイメージを心のより所に宗教と民族の再生に望みを託したのである。つまり、「第一神殿の破壊とこれに続くバビロニア捕囚は、ある意味では預言者の地位の勝利」<sup>(19)</sup>を意味していたのであり、イスラエルの地への帰還後に捕囚民たちが中心となって神殿を再建してからも、神殿における祭儀とともにユダヤ教の伝統の中にトーラーの学習・遵守が確固たる位置を占めるようになったのも当然のことであった。それは、神殿宗教としてのユダヤ教の大きな変質を物語る、「ユダヤ民族とユダヤ教の迎ってきた一つの時代の終焉を意味していた」<sup>(20)</sup>のだった。

しかし、同時に次の点も考慮する必要がある。それは、シナゴグが神殿とは性格を異にする施設であることを認めたくえて、タルムードが断定しているように、なおそこには神殿の代替物としての機能が生きていることである。もちろん、時代とともに、もっぱら供犠の儀式に重きを置き、



聖典についてはモーセ五書にしか普遍性を認めようとしない特権的な祭司階級によって司られる神殿礼拝はしだいに民衆の支持を失い、捕囚期の預言者ダニエルに由来するといわれる祈禱と<sup>(21)</sup>、同じく捕囚期のユダヤ人の宗教生活を支えたトーラーの学習がいよいよ重要性を増していったことはたしかだった。したがって、第二神殿の中庭にシナゴークあるいはこれに類した施設が存在し、祈禱とトーラーの朗誦が神殿の礼拝に組み込まれたこととシナゴークにおける祈禱の時刻が神殿における燔祭の時刻に従って決められていたことを併せて考えるならば<sup>(22)</sup>、当時の神殿とシナゴークは相互に影響を及ぼしあう並存関係を保ちながらも、第二神殿の建設からその崩壊にいたる数百年をかけて、ユダヤ人社会の内部では民族の宗教生活と共同体の核心は神殿からシナゴークへとゆっくりと移行していったというべきなのだろう。

#### 4. シナゴークの意味と役割

だが、それにもかかわらず、ユダヤ人にとって神殿こそがもっとも聖性の高い場所であることに変わりはなかった。たとえば、祈禱にしても、祈りを捧げる者はどこにしようとして顔をエルサレムと神殿の方向に向けなければならなかったし、神殿の山の聖性は聖都エルサレムの町全体が持つ聖性にまさり、神殿自体にしても、至聖所に近づくにつれてその聖性は高まっていくと考えられていた<sup>(23)</sup>。つまり、少なくとも現世におけるユダヤ人の宗教生活の究極点は神殿とその至聖所にほかならなかった。そして、これと同じ考え方はシナゴークにも適用されている。しかも、それはシナゴークの建物のみならず、内部の構造にも反映しているのである。

まず、シナゴークの建物に関して見れば、先に触れたダニエル書に立ち戻る必要がある。そこには、「ダニエルは……家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまづき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた」(ダニエル書6.11)と記されている。この故事に倣って、シナゴークで祈る者はエルサレムに顔を向けなければならず、またダニエルの部屋に窓があったので、シナゴークに

も窓がなければならなかった<sup>(24)</sup>。

さらに、シナゴークの礼拝における祈禱と並んで、いやむしろ祈禱以上に重要視されていたトーラーの朗誦のために<sup>(25)</sup>、シナゴークにはトーラーを記した巻物が置かれていた。これはタルムードではノアの箱舟を意味するテーヴァーという語が当てられ、中世においてはアロン・ハコデシュと呼ばれた聖櫃に納められていたが、トーラーの巻物とこれを納めた聖櫃はともにシナゴークの中ではもっとも聖性の高いものと考えられていた<sup>(26)</sup>。この聖櫃は、初期のシナゴークでは移動可能な大型の容器に収められ、礼拝所の外に保管されていたが、やがてエルサレムに向かった壁面に小さなアプシスあるいは壁龕を設けてここに安置されるようになった。さらに、この聖櫃の前にはカーテンがかけられているが、これは明らかに神殿の至聖所を連想させるものである。というのも、かつて神殿の至聖所は二枚のカーテンによって聖所から仕切られていたからであった<sup>(27)</sup>。

しかも、ここで重要なことは、聖櫃とその安置場所がたんに至聖所を模したものだという点にあるのではない。とりわけ、第二神殿が破壊され、ユダヤ人が世界中へ離散してからは、祖国の再興と神殿の再建はユダヤ人すべての悲願となっていた。それはまた、この悲願を実現するためにやがて到来するはずのダビデ家の血筋を引くメシアの登場への期待とも重なって、たとえばシナゴークの典礼で唱えられる祈禱の根幹をなすシュモーネ・エスレ、あるいはテフィラともアミダーもと呼ばれる十八祈禱の中に表現されている。特に第十四祈禱には「あなたの町、エルサレムに目を向けてください。あなたのシェキナーをこの町に住まわせて、早く、わたしたちの生きている間にあなたの正義が住まう町にしてください。その町がすべての民族にとって祈りの中心となりますように……」と、また第十五祈禱には「わたしたちの生きている間に、あなたが、あなたの僕たるダビデに与えられた約束、正義と慈悲の中であなたが世界を支配されるという約束を成就してください。急いであなたの光で世界を照らしてください……というのも、わたしたちはあなたの助けを待ち望んでいるからです」とある<sup>(28)</sup>。

ところで、ユダヤ社会史の大家のひとりであるヤーコブ・カツツはメシアニズムについて次のように語っていた。

「人間社会の理想的な状態を期待すること、それも過去の伝説的な英雄によって未来のある時に招来されるであろう理想的な状態を期待することは、ひじょうに広範囲に見られる、ほとんど人類に普遍的といってもよいほどの理念である。こうした理念にほぼ共通する特徴として、こうした期待される状態をその社会の歴史において理想的であった過去の時代に合わせようとする傾向を挙げることができる。その結果、未来の救済は何かまったく新しいもの示すというよりは、むしろ失われた財産の回復として行われるのである」<sup>(29)</sup>。

たしかに、上に見た二つの祈禱にしても、神の正義と慈悲のうちにある神の王国の実現に対する期待は言うまでもなく、この期待を支えているのが「失われた財産」、すなわち神に選ばれたダビデ、ソロモンの時代の栄光と繁栄を謳歌したエルサレムとナタン預言を通して神によって永続を保證されていたダビデ王朝の記憶であることがそこからは読み取れる。シナゴグにおける礼拝自体が未来における神殿の再建までの代理礼拝としての性格を持っていることを考えれば<sup>(30)</sup>、シナゴグにおいて祈願されるユダヤ人のメシア待望は、カツツが述べるように、まさに過去の栄光と未来の勝利がみごとに結びついたヴィジョンとして構想されているといえるだろう。

とすれば、シナゴグの中でエルサレムに向かってテフィラを唱えるユダヤ人たちは、そのときまちががなくエルサレムの過去と結びつきながら、同時に未来のエルサレムをも幻視していたはずである。いや、それだけではない。朗誦によって耳に響き入るトーラーの言葉ばかりでなく、そのときユダヤ人たちの目の中で、聖櫃を安置するカーテンで覆われたアプシスや壁龕はユダヤ神殿の至聖所そのものへと通じ、トーラーの巻物とそれを納めた聖櫃は至聖所から失われて久しい「契約の箱」と重なって映っていたのではないだろうか。

もちろん、こうした過去と未来を連続的につなぐ時間の中で、未来の出

来事は世界の創造者であるばかりでなく歴史の主宰者でもある神の専管事項であることに変わりはない。だが、少なくともシナゴグで倦むことなく繰り返し朗読されるトーラーは「過去の歴史の宝庫であったばかりでなく、歴史全体についての啓示された範例でもあった」<sup>(31)</sup>。また、ユダヤ人は「歴史には地上に神の王国を樹立するというひとつの目的があり、ユダヤ民族にはその過程で中心的な役割がある」<sup>(32)</sup>ことも痛いほど認識していた。ユダヤ人にとっては、これこそが神がイスラエルとの間に結んだ契約の本質にはかならなかった。しかも、ユダヤ人にとって、神がイスラエルの民と結んだ契約は永遠のものであり、けっして解消されることはなかった<sup>(33)</sup>。つまり、この契約の最終的な実現に向かう努力こそが、ユダヤ人をユダヤ人たらしめる最大の要因だともいえるのである。

その意味では、シナゴグの聖櫃は空間的にひとつの頂点を構成するキリスト教会の祭壇とは根本的な違いを見せている。それはそこにすべてが集約される場所ではなく、むしろ、民族と宗教の過去につながりつつ、「勝利に輝く未来」へ向かって「その背後に控えている出来事へと通じる玄関ホール」<sup>(34)</sup>でもあったのである。

## 5. まぼろしの「現在」

シナゴグが祈禱やトーラーの朗読あるいは聖櫃を通して礼拝者たちの前にユダヤ民族の過去と未来とを一体のものとして現出させることで、ユダヤ人たちは自分がそこに展開される壮大な歴史のドラマに連なる民族の一員であることを確認した。したがって、シナゴグとその典礼はある種の集団的記憶の形成と伝承の場であり、そのための仕掛けであるともいえるだろう。だが、たとえばアシュケナージ系ユダヤ人とセファルディー系ユダヤ人の区別を持ち出すまでもなく、その同じユダヤ人たちが、離散先でさまざま異なる環境の中で暮らし、それぞれに独自の時間を刻んできたことも事実であった。とすれば、そのときユダヤ人たちにとって、目の前に展開される「現在」とはどのような意味を持っていたのだろうか。

これについては、イェルシャルミが中世ユダヤ人の年代記を例に取りな

がら、そこには「出来事を昔のこととし、概念的な枠組を作りあげる傾向……新しい大きな出来事さえもありふれた元<sup>アーキタイプ</sup>型にあてはめてしまう傾向があった」<sup>(35)</sup>と語っている。これは、とりもなおさずユダヤ教の聖書がすでに後に起こるあらゆる歴史上の出来事を先取りして提示しているとユダヤ人たちが理解していたことを意味している。あるいは、たとえ現実に何が起ころうとも、それはことごとく神の計画・配剤によって出来たものでしかなかったという歴史認識ということもできる。古くは北イスラエル王国を倒したアッシリアにしても、じつは神に背いたイスラエルの民に対する神の怒りの手段でしかなく、バビロニア捕囚もまたイスラエルの犯した罪に対する神の罰にほかならなかった。さらにはそのバビロニアを滅ぼし、捕囚民のイスラエルの地への帰還を許したペルシア王キュロスも神が遣わした解放者として、また、ローマによる第二神殿の破壊にしてもユダヤ人の罪と神の罰として受け取られていた<sup>(36)</sup>。いずれにしても、この観点に立てば、「現在」においては何ひとつ偶然的なことも新奇なことも起こることはなく、神とユダヤ人の間に展開されるドラマの枠組の中ですべては「元型」に収斂することになるのだった。

たしかに、イェルシャルミのこうした見解は、アモス・フンケンシュタインが指摘するようにキリスト教の予型論的な考え方と大きな違いはないかもしれない<sup>(37)</sup>。また、同じくフンケンシュタインが語るように、「12世紀に至るまで、キリスト教ヨーロッパは現在の出来事を聖史における重要な出来事とは見なしていなかった。彼らは、原始キリスト教とキリストの再臨、つまりキリストの第二の「出現」までの間の世界は……「年を重ねる」以外には何も起こらない時代」<sup>(38)</sup>であったと考えていたのだとすれば、「現在」に関する認識にも大差はないといえるだろう。しかし、フライシュマンが記す次の一節からは、それでもなおユダヤ人の歴史意識と聖書に対する基本的な姿勢を確実に読み取ることができる。

「イスラエルの子供たちが苦役を強いられたエジプト、強力なファラオに率いられた豊かなエジプトの文化は溶けて流れさってしまった。強大なバビロニアの支配者ネブカドネザルは第一神殿を破壊したが、そのバ

ピロニアが残したものはわずかに考古学的な痕跡にすぎなかった。ヘレニズムの神々と、第二神殿を破壊し、イスラエル民族を離散へと追いやった広大なローマ帝国が残したものは、いくつかの彫刻と文書だけであった。しかし、モーセに告げられた言葉は生命を保ちつづけた<sup>(39)</sup>。

トーラーあるいは聖書の言葉は時間と空間を超えてたしかに生き延びた。その強靱な生命力は、たとえば2世紀のローマ皇帝ハドリアヌス（在117-138）の時代に由来するエピソードからも窺い知ることができる。これによれば、ハドリアヌスがユダヤ人に対してトーラーの学習を禁止したことがあった。ところが、この禁令を破ってあるラビが公然とトーラーの教授を行なったために火刑に処せられることとなった。ローマ人はこのラビの体に羊皮紙に記されたトーラーの巻物を巻きつけて火を放ったという。そのとき、処刑に立ち会ったラビの弟子たちが「師よ、何が見えますか」と尋ねた。するとラビは「トーラーの燃える様が見える。だが、わたしには空中を漂うトーラーの文字も見えるのだ」と答えた<sup>(40)</sup>。

いうまでもなく、空中に漂うトーラーの文字はラビの死と共に雲散霧消してしまうのではない。それは、たとえこの地上のどこでなにが起ころうともつねに空中に漂いつづけ、神の尊厳の現存とされるシェキナーのようにたえずユダヤ人たちと共にありつづけるのである<sup>(41)</sup>。

それにしても、成文化されることで永遠の生命を獲得したはずの聖書さえもが、ついには羊皮紙という物質を離れて空中を漂いはじめることでより強力で柔軟な存在へと自らを昇華させていく。まるで民族の離散という運命に符牒を合わせるかのような、こうしたユダヤ教の生命力を考えるならば、ユダヤ人たちが二千年近くにおよぶ離散生活をユダヤ教の教えから逸れることなくまさに「ユダヤ人」として生き延びたことも納得ができるだろう。また、そのとき、離散の地における目の前の「現在」とともに、あるいはそれを超えて身近に存在をつづける神のシェキナーと空中に漂うトーラーの文字は、離散ユダヤ人にとってはその過去と未来を凝縮した「ユダヤ人の現在」として目の前の出来事よりもはるかに大きなリアリティを持っていたにちがいない。いや、ユダヤ人にとって、離散の地に展開される

「異邦人の現在」あるいは「宿主社会の現在」はひょっとしたら「ユダヤ人の現在」と比べれば「メシア到来までの停滞した時間」<sup>(42)</sup>にすぎず、「空白」にも等しいものと映じていたのかもしれないのである。

そして、これをシナゴークにあてはめるならば、それがトーラーを納めた聖櫃を安置し、祈禱とトーラーの朗誦が行なわれる重要な場所であるとしても、じつはシナゴークの建物自体には大きな意味が与えられているわけではなかった事実と符合する。ユダヤ教では、宗教上の成人式であるバル・ミツバを済ませた十三歳以上の男性信者が十人集まるとシナゴーク共同体の形成が認められる。そして、たとえどこであろうと、その十人が礼拝のために集うとき、その場所がシナゴークと見なされる。つまり、建物という物質ではなく、ミンヤンと呼ばれるこの「十人という定数こそが、もっとも基本的な意味においてシナゴークを構成しているといえる」<sup>(43)</sup>のである。

とすれば、祈禱、トーラーの朗誦といった礼拝に加えて聖書の学習や研究、司法機関、共同体の管理機構や集会所が集中し、ときとして旅行中の同朋の宿泊施設ともなったシナゴークとその関連施設はまさに民族のコミュニティセンターと呼ぶにふさわしい機能を作り上げたといえるだろう<sup>(44)</sup>。しかも、そこに流れる時間は共同体とシナゴークを取り巻く周囲の世界の時間からきっぱりと切り離された「ユダヤ人の現在」であった。その意味では、シナゴークは不可視かつ普遍的な存在であるユダヤ教の神の特性を、またそうした神とイスラエルの民の間で結ばれた永遠の契約をみごとに体現しているのである。

## 6. 逆襲する「現在」—おわりにかえて

これまで、おもに成立期から制度・施設としての確立期にかけてのシナゴークに焦点をあててその特徴を探ってきたが、そこに見られた「ユダヤ人の現在」を保持し、強化するというシナゴークの機能はユダヤ人の離散生活が長引くに連れていよいよその重要性を増していくことになる。だが、それは同時にシナゴークからそうした機能を奪い去り、無効化しよう

とする勢力の圧力を強める効果を持っていたことも忘れてはならない。宿主社会から見れば、それは自己の体内に寄生しながら、頑として周囲の組織に融合しようとしないうっかいな異物に等しいものであった。少なくとも、それがキリスト教社会を離散の地と定めたユダヤ人に対するキリスト教会の見方であったことはたしかである。これを「ユダヤ人の現在」に対する「宿主社会の現在」の反発・逆襲と呼んでもよいだろう。しかも、その反発と逆襲は思いのほか早くやってきたのである。

ハドリアヌスの時代からほぼ百年の後、ユーフラテス河畔にある小アジアの町カリニクム（現シリアのラッカ）でシナゴーク放火事件が起こった<sup>(45)</sup>。この事件は計画的なもので、これを示唆したのは地元の司教であった。この事件の報告を受けると、ユダヤ人を保護すべき立場にあったローマ皇帝テオドシウス一世（在379-395）は、早速カリニクムの司教にシナゴークの再建を命じた。ところが、当時キリスト教界にあって絶対的な権力をふるっていたミラノ司教アンブロシウス（340頃-397）がこの命令にはげしく異論を唱えた。それどころか、「キリストを否認する場所がこれ以上存在しないようにするために」<sup>(46)</sup>自らが放火犯人であるとさえ名乗りでた。こうなると皇帝にもなすすべはなかった。皇帝はミラノ司教の声に屈したうえ、キリスト教徒とユダヤ人の異宗間結婚を禁じる法律の施行を認めさせられる破目になったのである。

このときアンブロシウスはシナゴークを指して「シナゴークは不信仰の場、神を恐れぬ者たちの集まる所、狂気の隠れ家、神ご自身によって呪われた場所である」<sup>(47)</sup>と口を極めて罵倒したが、この初代教会教父の言葉はその後のシナゴークの運命を先取りするシグナルであったともいえるだろう。そして、このシグナルに即座に答えたのが、アンブロシウスとほぼ同時代を生きたコンスタンティノーブル司教ヨハネス・クリュゾストモス（344/355—407）であった。クリュゾストモスによれば「シナゴークは売春宿、悪徳の家、悪魔の避難所、サタンの要塞、魂の腐敗、あらゆる災いを秘めた深淵」<sup>(48)</sup>にほかならなかった。

だが、その千年後になってもこのシグナルの響きは衰えてはいなかつ



た。しかも、このときの応答者は、教会教父たちが組織の確立に心血を注いだキリスト教会の大分裂を引き起こしたマルティン・ルターであった。晩年に多くの反ユダヤ文書を発表したルターは、特に1543年の『ユダヤ人とその虚偽について』の中で、ユダヤ人たちが「キリストとわれわれを騙し、口汚く罵り、呪い、つばを吐きかけ、冒瀆している」<sup>(49)</sup>場所であるシナゴグを焼き払うよう諸侯に提言しているのである。

それにしても、自分たちの過去と未来にしっかりと視線を据え、自らの使命を自覚している者たちに対して、本来ならば彼らとは直接関係ない周囲の社会の「現在」に目を向けるよう求めたとしても、望ましい反応が返ってくるはずがなかった。それでもなお、この両者が共存していかなければならないとしたら、そこに強い緊張関係が生じるのは避けがたいことであった。しかも、その緊張関係が強まれば強まるほど、ユダヤ人たちの過去と未来への憧憬も深まり、「ユダヤ人の現在」に固執することとなる。それがまた、周囲の苛立ちと不満を募らせる。これを端的に表していたのが、シナゴグを焼き払おうとした、また、後には「洗礼か死か」の選択肢を突きつけてユダヤ人に執拗に改宗を求めたキリスト教会の態度であったことはいままでもないだろう。

神殿を失って一人立ちを余儀なくされたシナゴグは、こうして中世に入ると離散ユダヤ人とともに否応なく「宿主社会の現在」すなわちキリスト教ヨーロッパ社会の歴史の渦に飲み込まれていくのである。

#### 注

- (1) Lea Fleischmann, Schabatt, Hamburg 1997 (5. erweiterte u. aktualisierte Neuauflage) (=Fleischmann), 9頁。
- (2) Sigmund Freud, Der Mensch Moses und die monotheistische Religion, in, ders., Gesammelte Werke, London 1940-1968, 18 Bde., Bd. XVI (1981<sup>6</sup>), 223頁。以下も参照：Y・H・イェルシャルミ『ユダヤ人の記憶 ユダヤ人の歴史』(木村光二訳・晶文社1996年) (=イェルシャルミ) 178頁。
- (3) ユダヤ教の聖典は聖書とタルムードを基本とする。このうち聖書は、モーセ五書(トーラー／律法：創世記, 出エジプト記, レビ記, 民数

記、申命記の五書で「成文律法」とも呼ばれる)、預言書(ヨシュア記、サムエル記、イザヤ書、エレミア書、エゼキエル書など八つの預言書からなる)、諸書(ヨブ記、哀歌、詩篇などからなる)から構成される。バビロニア捕囚から解放された前5世紀頃からそれまで伝えられてきたさまざまな伝承を収集し、編纂する作業が本格化し、前2世紀末から前1世紀かけて聖書が成立した。これと並行して聖書の解釈や注釈が行われるようになり、これが「口伝律法」として2世紀末に成文化された。これを「ミシュナ」という。さらにこの「ミシュナ」についても解釈、注釈、議論などが行われたが、これを集大成したものが「ゲマラ」となった。そして、「ミシュナ」と「ゲマラ」を合せたものが「タルムード」である。「タルムード」には「エルサレム(パレスチナ)・タルムード」と「バビロニア・タルムード」があり、前者は4世紀、後者は6世紀に完成した。

- (4) Encyclopaedia Judaica (=EJJ.), Jerusalem 1972, 16 vols., Vol. 15, 594頁。
- (5) The Jewish Encyclopedia (=JE.), New York & London 1901-1905, 12 vols., Vol. XI, 804頁。
- (6) Günter Stemberger, Das klassische Judentum : Kultur und Geschichte der rabbinischen Zeit, München 1976 (=Stemberger), 92頁を参照。
- (7) エゼキエル書をめぐる議論については以下を参照 : Carol Herselle Krinsky, Synagogues of Europe. Architecture, History, Meaning, New York 1985 (=Krinsky), 5頁 ; Hannelore Künzel, Der Synagogenbau in der Antike (=Künzel), in, Hans-Peter Schwarz (Hrsg.) ,Die Architektur der Synagoge, Stuttgart 1988 (=Schwarz), 45頁 ; Stemberger, 93頁 ; EJJ., Vol. 15, 580-581頁 ; JE., Vol. XI, 619頁。
- (8) Ismar Elbogen, Der jüdische Gottesdienst in seiner geschichtlichen Entwicklung, Hildesheim 1962 (=Elbogen), 446-448頁 ; Künzel, 48頁 ; Hans-Peter Schwarz, Vorwort [zu Schwarz, Die Architektur der Synagoge], in, Schwarz, 17頁 ; EJJ., Vol. 15, 581頁 ; Jüdisches Lexikon, Berlin 1927 (Nachdruck : Frankfurt a.M. 1987<sup>2</sup>), Bd. IV / 2, 792頁。
- (9) タルムードについては、注(3)を参照。
- (10) Der babylonische Talmud, nach der ersten zensurfreien Ausgabe unter Berücksichtigung der neuen Ausgaben und handschriftlichen Materials neu übertragen durch Lazarus Goldschmidt, Frankfurt a. M. 1996 (=B.T.), 12 Bde., Bd. III, Sukka 51b, 397-398頁。引用部は

397頁。

- (11) B.T., Bd. IV, Megilla 29a, 119頁を参照。
- (12) B.T., Bd. III, Sukka 51b, 397頁。
- (13) 480説はエルサレム・タルムード, 394説と神殿山頂のシナゴークについてはバビロニア・タルムードに拠る。それぞれ以下を参照：Martin Hengel, Hans Peter Rüger, Peter Schäfer (Hrsg.), Übersetzung des Talmud Yerushalmi, Bd. II / 10, Megilla3. 1 (übers. von Frowald G. Hüttenmeister), Tübingen 1987, 110頁；B.T., Bd.V, Kethuboth 105a, 337頁；B.T.,Bd. VI, Sota 7: 7- 8, 140頁および Bd. III, Yoma 7: 1, 140頁。
- (14) たとえばダマスカス, 小アジア, キプロス, シリア, フェニキア, バルカン半島, ギリシア, エーゲ諸島, スペイン, ガリア, ハンガリー, シシリアを含むイタリアなどである。以下も参照：EJJ., Vol. 15, 582頁。
- (15) Künzel, 47頁を参照。
- (16) 出エジプト記および申命記を参照。
- (17) Elbogen, 235頁を参照。
- (18) 以下を参照：ミカ書3.12；エレミヤ書7.4, 7.14, 26.4—6, 26.18；エゼキエル書5.11；EJJ., Vol. 15, 945頁。
- (19) EJJ., Vol. 15, 945頁。
- (20) EJJ., Vol. 15, 945頁。
- (21) ダニエル書6.11を参照。
- (22) EJJ., Vol. 15, 983頁。
- (23) EJJ., Vol. 15, 969頁参照。
- (24) Krinsky, 9頁を参照。
- (25) なお初期にはトラーと共に預言書の朗読も行なわれ, 聖櫃にもトラーの巻物と預言書が納められていた。以下を参照：Encyclopaedia Judaica, Berlin 1928-34, 12 Bde., Bd. 10, 1047頁；Stemberger, 101頁。
- (26) Krinsky, 24-25頁を参照。
- (27) 中庭や広場, 関連施設を除けば, 神殿自体は玄関ホール, 聖所, 至聖所の三つの部分から成り立っていた。神殿最深部にあった至聖所は聖所とはカーテンで仕切られていた。第一神殿の至聖所にはケルビムの像に守られた「契約の箱」が安置されていたが, バビロニア捕囚の際に喪失, 第二神殿の至聖所には何も置かれていなかった。至聖所には, 年に一度, ユダヤ教の新年にあたるティシュリ月十日目の贖罪の日(ヨム・キプール)に焼香のため大祭司だけが入場を許されていた。
- (28) Jonathan Magonet (Hrsg.), Das jüdische Gebetbuch, Gütersloh 1997,

- 2 Bde., Bd. I (übers.von Anette Böchler), 181頁。以下も参照：Pnina Navè Levinson, Einführung in die rabbinische Theologie, Darmstadt 1993 (3. erweiterte Auflage), 84頁。
- (29) Jakob Katz, Zwischen Messianismus und Zionismus, Frankfurt a. M. 1993 (=Katz), 22頁。
- (30) Katz, 24頁を参照。
- (31) イエルシャルミ, 50頁。以下も参照：Stemberger, 101頁；Fleischmann, 90頁。なお、シナゴークでは、礼拝の際にミサにおいて創世記の冒頭から申命記の最後の一節まで、これを54節に分けて一年をかけて朗誦する。朗誦は、出エジプト後のシナイ砂漠での放浪生活をしのぶ仮庵祭(スッコート)の二日目、トーラーの授与を喜び感謝するスイムハト・トーラーの日の創世記から始まり、一年後の申命記で終わり、同じ日にただちに次の朗誦がはじまる。ちなみに、一年のサイクルはバビロニアで広まった慣習が一般化したもので、パレスチナでは三年周期で行なわれていた。
- (32) イエルシャルミ, 50頁。
- (33) Fleischmann, 86頁。
- (34) Gerhard W. Mühlingshaus, Der Synagogenbau des 17. und 18. Jahrhunderts, in, Schwarz, 140頁。
- (35) イエルシャルミ, 69頁。
- (36) 以下を参照：イエルシャルミ, 50-51頁；イザヤ書44.26-45.7。
- (37) Amos Funkenstein, Jüdische Geschichte und ihre Deutungen(aus dem Englischen von Christian Wiese), Frankfurt a. M. 1995 (= Funkenstein), 22-26頁を参照。
- (38) Funkenstein, 24頁。
- (39) Fleischmann, 101頁。
- (40) 引用は以下による：Elie Wiesel, Macht Gebete aus meinen Geschichten, Freiburg/Breisgau 1986, 139頁。
- (41) シェキナーは「滞在・居住」を意味する言葉で、「神のシェキナー」とは「神が人々のもとに居合わせること」を示す。ただし、神そのものではなく、「神の尊厳」を指し、神殿では至聖所に座し、イスラエルが追放されればこれに伴い、祈りを捧げるあらゆるユダヤ人共同体に現存していると考えられている。
- (42) イエルシャルミ, 79頁。
- (43) Krinsky, 5頁。
- (44) 以下を参照：Elbogen, 452-453頁；Stemberger, 107-108頁。
- (45) この事件については以下を参照：Hans Kühner, Der Antisemitismus

der Kirche, Zürich 1976 (=Kühner), 33-34頁； Gerhard Czermak, Christen gegen Juden, Reinbeck bei Hamburg 1997 (=Czermak), 38-40頁。

(46) Kühner, 34頁。

(47) Kühner, 34頁。

(48) Kühner, 36頁。以下も参照：Czermak, 35頁。

(49) Martin Luther, Über die Juden und ihre Lügen, in, ders., Dr. Martin Luthers Werke (=Weimarer Ausgabe/unveränderter Abdruck), Weimar 1967-, Bd.53 (1981), 523頁。以下も参照：拙著『洗礼か死か ルター・十字軍・ユダヤ人』(1993年林道舎)。

(付記：本稿は平成10年度慶應義塾学事振興資金による研究補助によって  
いる)